菊池先生を思う

村田　修子

平成四年の終盤には様々なことがあった。が、その中で菊池フジノ先生とお別れしなければならなかったことは最もつらく悲しいことであった。

このお知らせを受け〝アッ〟と思ったときにすぐ、やさしい笑顔、口をすぼめて恥ずかしげな様子をなさる笑顔がすぐ思い出されて、自然に涙が溢れた。ここで先生のことを書くことによって先生を思い出し、ご冥福をお祈りするのは、永くおそばで過ごさせて頂いたもののつとめだという気がする。

間もなく二十一世紀を迎えるが、現在は大変な二十世紀を生きぬいてきた人たちである。その大変な時期に学校を卒業して、何も

分からないまま社会に出たときに出会った人、相談にのって頂いたりアドバイスを受けた人は「忘れ得ぬ人」である。私にとって菊池先生はまさにそのお一人なのである。

お茶大の附属幼稚園につとめていたとき、私と先生は同じ駅の南口と北口に住んでいた関係で、よくご一緒に帰った。また私が教育実習をしたとき、小学校で三女の道子さんを、女学校で二女の弘子さんを担当したこと等で、何となく親しみを感じていた。それに加えて先生の周辺にただよう雰囲気が〝甘えられるお母さん〟という感じだったので、遠慮なく何でもお話しできたのだと思う。

帰りの電車の中では話がはずみ（今考えれば、先生にとってはご迷惑だったのかも知れないが…）園ではうかがえないような事なども聞かせて下さった。その中の一つ、

現在音楽の大御所としてご活躍の柴田南雄先生が、同級の女の子と一緒にだまって園を出て駿河台下までおりてきて市電に乗り、小川町まできたとき切符を売りにきた車掌さんに手を出して切符をもらおうとして（切符は買うのではなくもらうものだと思っていたとのこと）不審に思われ、小川町でおろされてしまいうろうろしていたとき、どなたかが幼稚園に電話をしてくれたので迎えにこられて園に帰ったことがあったとの話で、大騒ぎしていた幼稚園では、倉橋先生の心づかいで、〝このことは母親には聞かせないでおきましょう〟と、倉橋先生自ら父親の方にだけ連絡をしたいきさつや、園をたずねてこられた先生方の時代のことや、第二次世界大戦の頃のことなどを伺った。

その当時大部分の人が好きであったドイツ

のヒットラーが倉橋先生は嫌いで、イギリスのチェンバレン首相が好きだった。菊池先生も同じだったことや、倉橋先生は英国紳士と同じに〝いつも白い手袋をして帽子をかぶられ、ステッキを持って歩かれ、とてもおしゃれでいらっしゃったのよ〟等々、多分に倉橋先生と関連のあることが多かったように思う。

伺ったお話や、先生方がみんなでお食事をしているときのふれ合いなどから、ウィットいっぱいの倉橋先生のおっしゃることにツー、カーという反応をなさったように思えたし、倉橋先生もその雰囲気を楽しんでおられたという感じであった。

幼稚園界で菊池フジノ先生、というと、ご存知のように「人形の家」ということがすぐ頭に浮かんでくる。倉橋先生のおっしゃられたことをもとに先生とご相談をしながら、人形の住む家を子どもたちと相談しながら作り、お人形が生活するのに必要と思われるものを整えて、子どもたちの友だちとしてお人形を存在させた。

私はこの時期のことを直接は知らないけれども、このときのお二人の先生の意気はピッタリと合ったものだったのではないかと想像される。それは、菊池先生は一つのことに熱中なさる方だからである。熱中なさるという話では次のようなこともある。

菊池先生が女子高等師範学校の生徒でいらっしゃったころ、バイオリンの名手ヤッシャ・ハイフェッツが来日した。寄宿舎にいた先生は願ってその演奏を聞きに行き、それに大変感動して、七月に入って夏休みに宮城県の実家に帰るとき、バイオリンを買いこん

で、家に帰ってから練習に励んだが、周囲から非難を受けてからは納屋に入って練習に打ち込んだが、しめ切った中なので〝その暑さはこたえたわよ〟とおっしゃった。相変わらずひどい音なので親にやめるように言われた、ということであった。

またお茶大の附属幼稚園で、毎月の誕生会のときに先生方がリズム劇をよくやった。そのとき演ずるものによっては先生にも参加して頂いた。お母さん役や、申しわけないけれどお婆さん役をよくやって頂いた。「ちびくろサンボ」をやったとき、お母さん役になっ

▲　幼稚園百年記念式典のとき、お茶大附属幼稚園での園遊会で。珍らしく手を上げられて晴々とした菊池先生。左側は山村キヨ先生。

た先生はこりにこった。スカートはこれ。頭にかぶるものは……。めがねははずして、イヤリングはこれで作るわ。とキラキラ光った何かの環を適当に長くつなげて、南の国のあついところのお母さんになるべく、いろいろと工夫をなさった。演技も〝こうした方がいいかしら〟〝どうみえる?〟というように本当に一生懸命にこられた。

演劇・演技に興味を持たれ、幼児向きの人形劇の台本を作られたこと等も知ってはいたが、〝あっ、こういう熱意で取り組まれたのだな〟と分かったし、こういう点でも倉橋先生と気心が合っていらっしゃったのではないかしらとも思った。

私が就職したての頃、先輩から〝菊池先生はとても頭のきれる方だから、実習に来た学生は「こわい」とよくいうらしいわよ〟というのを耳にしたことがある。私は先生とそういうふれ方はしたことがないのでただ聞いていたが、そういわれてみると、こういう事柄をいうのかな、と思ったことがある。二年程前にお会いしたとき、とった写真をお送りした。そのときのお礼のお葉書に

〝写真の数々、ありがとうございます。機械と腕の優秀さが偲ばれます。皆がとても美人に写っていますね。私までが……。〟

（後　略）

ウイットのきいた表現に、若しかしたら若い学生さん方はおそれをなしてしまって、そういう見方をしてしまったのではないかしら、と思ったりした。

先生は和服を召されても洋服を召されて

も、とてもとても、はいからだった。

私が幼かった頃、町の中にははかまをはいて少しヒールの高い皮靴をはき、着物の袖をひらひらさせていた学生さんの姿があった。現在は卒業式のときなど見かけるようになったあの姿である。

それはとてもはいからな人のように私には思えた。その雰囲気が菊池先生に感じられて懐かしかった。その雰囲気は子どもと同じように夢があって、初めて幼稚園という未知の世界の教師になってとまどっていた私は、そんな思いもあって先生にいろいろなことを相談して甘えていたように思う。

忘れられないことばは、私が幼稚園で自分の学んだこととは違うことをしている悩みを一寸もらしたとき「そう思っているのなら、私のようにどうにもならなくなる前に早くそれをしなさい。早い方がいいわよ。」私は耳を疑った。菊池先生の口からそういう趣旨のことばを聞くとは思わなかったので忘れられないのである。先生も私と同じように悩まれたのだろうか。どのように、何をしたいと思っていらっしゃったのだろうか、と思いをめぐらしてみたが結局は分からなかった。それに普段お子さんといらっしゃる先生は全く幼稚園にいることを楽しんでおられるご様子であったし、成長したかつての子どもたちのことを話される時はとてもうれしそうになさっていらっしゃったので、そこからは迷われたときがあったなどとは思いも及ばなかった。

何年かたって〝あなたもとうとう……〟といわれたけれど私も〝私も案外子どもが好きだったことを発見したので……〟ということ

でこの話題は終わりになった。

その後私が先生に言ったことばは、〝先生、腰をのばして下さい。まがってますよ〟とお腰をポンと叩いて遠慮なく申し上げた。

〝あらそーう。またいわれたわね〟何回かそうして腰をのばして下さった。

あるとき、私の背中をポンと叩いて、〝あなたも背中がまがってますよ〟と、

そのときの先生の顔は、いたずらっぽく、そしてほこらしげで、「かりは返した」と満足なさった様子が読みとれた。

〝先生、何の遠慮することなく思うままに甘えさせて頂いて有難うございました。〟

（洗足学園短期大学・同附属幼稚園）